

島根県農業気象広報特集

－平成19年農林作物をかえりみて－

平成20年5月

島根県
松江地方気象台

目 次

(執筆者)

| | | | |
|------------------|--|--------------------------------|--------|
| 平成19年の気象概況 | (松江地方気象台 調査官 | 吉原範行) | ・・・ 1 |
| 水稻 | (農業技術センター 農産技術普及指導G課長 (農業技術センター 農業環境G課長 | 曾田泰弘) 板垣紀夫) | ・・・ 4 |
| 麦類 | (農業技術センター 農産技術普及指導G課長 (農業技術センター 農業環境G課長 | 曾田泰弘) 板垣紀夫) | ・・・ 11 |
| 大豆 | (農業技術センター 農産技術普及指導G課長 (農業技術センター 農業環境G課長 | 曾田泰弘) 板垣紀夫) | ・・・ 13 |
| 野菜 | (農業技術センター 野菜技術普及G課長 専門農業普及員 遠藤義明 現西部農林振興センター益田事務所 専門農業普及員 松本修司 現東部農林振興センター 松江農業普及部安来支所 専門農業普及員 (農業技術センター 農業環境G課長 | 山本晃二 石川真治) 板垣紀夫) | ・・・ 15 |
| 花き | (農業技術センター 花き技術普及G課長 専門農業普及員 石井満彦 主任農業普及員 | 稲村博子 松山朋子) | ・・・ 17 |
| 果樹 | (農業技術センター 元果樹技術普及G課長 現栽培研究部長 山本孝司 専門農業普及員 現西部農林振興センター益田事務所 専門農業普及員 専門農業普及員 (農業技術センター 農業環境G課長 | 小室正夫 神城文典 長岡義治) 板垣紀夫) | ・・・ 19 |
| 茶樹 | (元農業技術センター 現西部農林振興センター益田事務所 専門農業普及員 | 神城文典) | ・・・ 24 |
| 造林 | (林業課 専門林業普及員 | 藤原芳樹) | ・・・ 25 |
| シイタケ | (元林業課 専門林業普及員 現中山間地域研究センター 木材利用G科長 | 中山茂生) | ・・・ 27 |
| 森林保護 | (林業課 専門林業普及員 | 古瀬 寛) | ・・・ 29 |
| 平成19年度農業気象災害被害状況 | | | ・・・ 31 |

平成19年の気象概況

平成19年1月から2月にかけて気温は高く推移し、松江では1月に統計開始以来、初めて積雪を観測しなかった。また、西郷でも2月の月平均気温が履歴1位となった。3月から5月にかけても気温は高く、降水量は少なめに推移した。6月も気温は高くなったが、7月は梅雨前線や台風の影響で曇りや雨の日が多くなった。8月から9月にかけては太平洋高気圧の勢力が強まり暑い日が続き、9月は松江・浜田・西郷で月平均気温が履歴1位となった。8月30日から31日にかけては、日本海の前線が南下して大雨となり、隠岐では山・がけ崩れや河川の氾濫により大きな被害が発生した。10月から12月にかけても気温は高く、降水量は少なめに推移したが、12月の終わりには冬型の気圧配置が強まり積雪となった。

年平均気温は全域でかなり高かった。年降水量は松江・浜田で少なく、西郷では平年並であった。年間日照時間は、松江・浜田では多く、西郷では少なかった。

中国地方の梅雨入りは6月14日頃で平年より遅く、梅雨明けは7月23日頃で平年より遅かった。梅雨期間の降水量は松江470.0mm、浜田451.5mm、西郷482.5mmであった。

1月

強い寒気の南下は一時的で、冬型の気圧配置は長続きしなかった。このため気温は平年より高く、積雪がなかった。1月に松江で積雪を観測しなかったのは、1941年の統計開始以来初めてである。

上旬：冬型の気圧配置や気圧の谷及び寒気の影響で曇りや雨の日が多かった。6日～7日にかけては冬型の気圧配置が強まったため風が強くなった。

中旬：気圧の谷や寒気の影響で雨や曇りの日が多かったが、15日と19日から20日は高気圧に覆われて晴れた。

下旬：気圧の谷や寒気の影響で雨や曇りの日が多かったが、25日と30日は高気圧に覆われて概ね晴れた。

2月

寒気の南下は一時的で、冬型の気圧配置は長続きしなかった。このため気温は平年より高く、降雪は少なかった。全域で暖かい日が続き、西郷では月平均気温が履歴1位となった。

上旬：冬型の気圧配置や気圧の谷及び寒気の影響で曇りや雨の日があったが、3日～7日にかけて高気圧に覆われ晴れとなった。

中旬：天気は周期的に変化した。14日には低気圧が日本海を発達しながら進み、南よりの風が強くなり「春一番」が吹いた。

下旬：高気圧に覆われ概ね晴れたが、中頃は気圧の谷や寒気の影響で曇りや雨の日もあった。

3月

期間の中頃は寒気が南下し、気温は低く推移した。前半と後半は高気圧に覆われる日が多く、3月としては暖かく推移した。終わりには発達した低気圧が日本海を東進し、この時期としてはまとまった雨となった。

上旬：初め高気圧に覆われ暖かい日が続いた。中頃は低気圧の影響で雨となり、後半には冬型の気圧配置が強まり雪となった。

中旬：初め冬型の気圧配置が強まり、雪やみぞれの天気となった。後半は晴れる時もあったが、寒気の影響で気温は低く推移した。

下旬：気圧の谷や前線の影響で雨の日があったが、天気は周期的に変化した。

4月

天気は周期的に変化し、雨や曇りの日もあったが、高気圧に覆われる日が多く、降水量は各地とも少なかった。

上旬：初め低気圧や寒気の影響で雨やみぞれの日もあったが、後半は高気圧に覆われ概ね晴れの天気となった

中旬：気圧の谷や低気圧の影響で雨の日もあったが、天気は周期的に変化した。

下旬：初め気圧の谷や低気圧の影響で雨の日もあったが、その後は高気圧に覆われ晴れの天気となった。

5月

低気圧や寒気の影響で雨や曇りの日もあったが、全般に高気圧に覆われる日が多く、気温は各地とも高くなった。

上旬：気圧の谷や低気圧の影響で雨の日もあったが、天気は周期的に変化した。

中旬：前半は高気圧に覆われる日が多かったが、後半は気圧の谷や低気圧の影響で雨の日となり、17日は強風となった。

下旬：高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、低気圧や寒気の影響で雨や曇りの日もあった。

6月

天気は周期的に変化し、高気圧に覆われて晴れる日もあったが、下旬には梅雨前線の影響により雨や曇りの日が多くなった。

上旬：中頃は高気圧に覆われて晴れの天気となったが、前半と後半は気圧の谷や寒気の影響で曇りや雨の日となった。

中旬：天気は周期的に変化し、中頃は前線の影響で雨や曇りとなった。

下旬：前線や低気圧の影響で雨や曇りの日があった。

7月

梅雨前線や台風の影響で雨や曇りの日が多かった。23日には梅雨明けとなったが、湿った気流が入りやすく雲が広がった。

上旬：梅雨前線の影響で雨や曇りの日が多くなった。

中旬：梅雨前線や台風第4号の影響及び上空の寒気のため雨の日が多くなった。

下旬：初め梅雨前線の影響で雨となった。23日には梅雨明けとなったが、湿った気流が入りやすく、雲が広がる日が多かった。

8月

初めは台風や上空の寒気の影響で雨となったが、その後は高気圧に覆われて気温の高い日が続いた。しかし後半は日本海の停滞前線が南下し大雨となった。

上旬：台風第5号や上空寒気の影響を受け雨や雷雨となったが、天気は周期的に変化した。

中旬：太平洋高気圧に覆われて晴の天気が続いた。

下旬：中頃は高気圧に覆われて晴の天気が続いたが、前半と後半は日本海の停滞前線が南下し大雨となった。

9月

初めは台風や低気圧の影響で曇りや雨の日が多かったが、その後の天気は周期的に変化し、気温は高く推移した。

上旬：低気圧や台風の影響で曇りや雨の日が多かった。

中旬：中頃は台風や前線の影響で雨となったが、前半と後半は高気圧に覆われ晴れの天気となり、気温は高く推移した。

下旬：停滞前線や気圧の谷の影響で曇りの日が多かったが、気温は高めに推移した。

10月

天気は周期的に変化した。西郷では低気圧や台風の影響で曇りや雨の日が多かった。

上旬：天気は周期的に変化した。気温は高めに推移した。

中旬：上空の寒気の影響を受け、曇りや雨の日が多かった。

下旬：前半は高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、後半は低気圧や台風の影響で雨となった。

11月

天気は周期的に変化した。冬型の気圧配置となり寒気の影響を受ける日もあった。

上旬：前半は前線や寒気の影響で曇りが多かったが、後半は高気圧に覆われて晴れとなった。

中旬：天気は周期的に変化した。冬型の気圧配置となり雨となった。

下旬：天気は周期的に変化した。冬型の気圧配置となり、寒気の影響を受けた。

12月

天気は周期的に変化した。下旬には冬型の気圧配置が強まり雪となった。

上旬：冬型の気圧配置となり、寒気の影響を受けた。

中旬：低気圧や寒気の影響により曇りや雨の日が多くなった。

下旬：天気は周期的に変化した。後半には冬型の気圧配置が強まり雪となった。

(吉原 範行)

水 稲

1 作付面積

平成19年産の水稻作付面積（子実用）は19,900haで、前年に比べて300ha（1%）減少した。これは、生産農家の高齢化による作付けの減少や、宅地化等のかい廃により田が減少したことによる。

品種別にみると、平坦部を中心に「コシヒカリ」の品質低下が続き、特に品質が悪いところでは大規模稲作農家や集落営農組織を中心に、18年産から本格栽培が始まった「きぬむすめ」への転換を推進した結果、「きぬむすめ」は、18年産の倍の約2,000ha以上の作付けとなった。

表1. 水稻主要品種の作付動向（島根農政事務所調べ）

| 種類 | 品種名 | 平16年 | 平17年 | | 平18年 | | 平19年 | |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| | | 面積(ha) | 面積(ha) | 比率(%) | 面積(ha) | 比率(%) | 面積(ha) | 比率(%) |
| うるち | ハナエチゼン | 1,240 | 1,334 | 7.0 | 1,462 | 7.2 | 1,353 | 6.8 |
| | コシヒカリ | 16,216 | 15,349 | 80.4 | 16,321 | 80.8 | 15,224 | 76.5 |
| | きぬむすめ | — | 16 | 0.1 | 1,077 | 5.3 | 2,010 | 10.1 |
| | 祭り晴 | 973 | 1,073 | 5.6 | 203 | 1.0 | | |
| (醸造用) | 五百万石 | 114 | 107 | 0.6 | | | 80 | 0.4 |
| | 神の舞 | 24 | 26 | 0.1 | | | | |
| | 佐香錦 | 22 | 15 | 0.1 | | 酒米計 | | |
| | 改良雄町 | 22 | 18 | 0.1 | | 0.8 | | |
| | うるち計 | 18,927 | 18,298 | 95.9 | 19,408 | 96.1 | 19,044 | 95.7 |
| もち | ヒメノモチ | 408 | 387 | 2.0 | | | | |
| | ココノエモチ | 208 | 207 | 1.1 | | | | |
| | ヤシロモチ | 152 | 146 | 0.8 | | | | |
| | もち計 | 813 | 782 | 4.1 | 792 | 3.9 | 856 | 4.3 |
| 合計 | 19,740 | 19,080 | 100.0 | 20,200 | 100.0 | 19,900 | 100.0 | |

注) うるち計は醸造用を含む。その他品種があり、計と内訳は一致しない。空欄はデータなし。

平18年以降面積の内訳は県農畜産振興課による推計値。

平17年までと平18年以降ではデータの出典、集計・算出方法に違いがある。

2 生育概況

(1) 育苗期、田植期

育苗期間の気温は平坦部は平年並み、山間部では低めに推移した。平坦部早植、山間部では苗の生育は草丈がやや短かった。平坦部5月上旬植以降は生育は順調であった。育苗中の障害として、山間部を中心に苗立枯病やムレ苗の発生が見られた。県全体の田植最盛期は5月13日で平年、昨年に対しても1日早くなった。

一部の地区で用水不足により、移植の遅れや移植断念があった。

(2) 活着期、分けつ期

田植後の活着は、田植以降5月第4半旬を除いて高温、多照に経過したことから平坦部各作期、山間部とも順調であった。活着が良好であったため、初期生育は順調であった。平坦部「ハナエチゼン」、早植「コシヒカリ」、山間部では日照時間も多く茎数が過剰になったほ場もあった。山間部では草丈が平年に比べ短く、茎数の多い生育となったが、その他では茎数、草丈とも平年並みの生育であった。

(3) 幼穂形成期、出穂期

6月下旬からの長雨、日照不足、7月に入ってから低温の影響で生育は停滞し、幼穂形成期は平年並み～平年に比べ2日程度遅れた。特に山間部では低温の影響が大きく、5～7日程度の遅れとなった。県全体の出穂最盛期は平年に比べ4日遅く、前年に比べ3日遅い8月7日となった。

また収量構成要素をみると、6月下旬から7月第5半旬まで日照時間が極めて少なかったことから、有効茎歩合が低下し、穂数は平年に比べ少なくなった。1穂当たり粒数は日照不足や、不安定な気象を考慮して施肥量が少なくなったことから穂数が減少した割には多くならず、やや多い状況となった。このため、面積当たり粒数は平年より少ない状況であった。

(4) 登熟期、成熟期

登熟期間は一転して高温に推移し、8月第2半旬前半から第5半旬までは日照時間も多く、登熟期間は出穂の遅いものほど短縮され、遅植コシヒカリやきぬむすめでは平年並みの成熟期となった。県全体の刈取最盛期は平年並みの9月16日で、前年に比べても3日早くなった。

なお、隠岐地方では8月下旬の豪雨により浸・冠水、土砂流入被害が発生した。

収量構成要素を見ると、8月第2半旬からの高温・多照の気象条件により、登熟歩合や玄米千粒重は平年並み～良好となったが、面積当たり粒数の不足を補うことはできなかった。

以上の結果、水稻作柄は10a当たり収量484kgで、作況指数は95、地帯別では出雲地帯（隠岐を含む）が95の484kg、石見地帯が97の485kgとなった。

表2. 平成19年度水稻作況試験成績(農業技術センター、中山間地域研究センター)

| 調査項目 | 場所 品種 田植日 | 出雲 ハエビソ 4/25 | | 出雲 コシヒカリ 5/10 | | 出雲 コシヒカリ 5/25 | | 出雲 きぬむすめ 5/10 | | 赤来 コシヒカリ 5/1 | |
|--------------------------|-----------------|--------------------|------|---------------------|------|---------------------|------|---------------------|------|--------------------|------|
| | | 本年 | 比較 | 本年 | 比較 | 本年 | 比較 | 本年 | 比較 | 本年 | 比較 |
| 葉齢 | 田植時 | 2.2 | -0.1 | 2.3 | +0.1 | 2.4 | +0.3 | 2.0 | -0.1 | 2.2 | 0.0 |
| 〃 | 20日後 | 4.5 | -0.5 | 5.2 | +0.1 | 5.9 | 0.0 | 4.9 | 0.0 | | |
| 〃 | 30日後 | 6.1 | -0.4 | 7.2 | +0.4 | 8.0 | +0.3 | 7.0 | +0.3 | 5.5 | -0.4 |
| 〃 | 40日後 | 7.6 | -0.5 | 8.8 | +0.3 | 9.1 | -0.1 | 8.6 | +0.1 | 7.1 | -0.5 |
| 〃 | 50日後 | 9.1 | -0.4 | 9.9 | +0.3 | 10.1 | -0.2 | 9.8 | -0.1 | 8.3 | -0.6 |
| 〃 | 60日後 | 10.4 | -0.2 | 11.0 | +0.3 | 11.2 | -0.3 | 10.8 | 0.0 | 9.6 | -0.4 |
| 〃 | 70日後 | 11.3 | -0.7 | 12.2 | +0.3 | 12.6 | 0.0 | 11.7 | -0.2 | 10.4 | -0.6 |
| 〃 | 80日後 | 12.3 | -0.2 | 13.0 | +0.6 | | | 12.8 | -0.2 | 11.2 | -0.8 |
| 〃 | 90日後 | | | | | | | 13.9 | +0.2 | 12.4 | -0.2 |
| 幼穂形成期(月/日) | | 6.22 | +1 | 7.05 | 0 | 7.17 | +2 | 7.17 | +1 | 7.12 | +7 |
| 出穂期(月/日) | | 7.20 | +5 | 8.05 | +5 | 8.13 | +5 | 8.18 | +5 | 8.07 | +6 |
| 成熟期(月/日) | | 8.20 | +4 | 9.07 | +2 | 9.13 | -1 | 9.20 | -1 | 9.15 | +3 |
| 草丈(cm) | 田植時 | 11.2 | 92 | 11.6 | 86 | 12.4 | 96 | 12.4 | 88 | 10.1 | 91 |
| 〃 | 20日後 | 18.3 | 88 | 23.1 | 104 | 22.5 | 96 | 21.0 | 85 | | |
| 〃 | 30日後 | 20.1 | 90 | 23.9 | 96 | 37.5 | 110 | 23.5 | 88 | 20.6 | 90 |
| 〃 | 40日後 | 24.8 | 91 | 35.7 | 100 | 57.4 | 111 | 32.6 | 89 | 24.9 | 94 |
| 〃 | 50日後 | 36.9 | 96 | 51.2 | 100 | 69.0 | 105 | 50.7 | 96 | 31.7 | 88 |
| 〃 | 60日後 | 52.2 | 98 | 66.2 | 103 | 76.8 | 100 | 68.3 | 97 | 49.7 | 100 |
| 〃 | 70日後 | 62.1 | 95 | 75.8 | 98 | 86.4 | 98 | 76.3 | 92 | 64.9 | 100 |
| 〃 | 80日後 | 73.0 | 94 | 88.2 | 97 | | | 87.2 | 95 | 71.8 | 93 |
| 〃 | 90日後 | | | | | | | 96.5 | 99 | 80.8 | 89 |
| 稈長(cm) | | 70.3 | 99 | 78.8 | 95 | 86.6 | 98 | 83.6 | 97 | 76.7 | 96 |
| 穂長(cm) | | 17.9 | 102 | 19.8 | 101 | 18.2 | 95 | 18.5 | 98 | 18.7 | 98 |
| 茎数(/m ²) | 20日後 | 88 | 93 | 118 | 92 | 246 | 99 | 105 | 82 | | |
| 〃 | 30日後 | 171 | 85 | 331 | 104 | 466 | 102 | 287 | 97 | 209 | 123 |
| 〃 | 40日後 | 316 | 85 | 570 | 107 | 521 | 96 | 532 | 94 | 350 | 104 |
| 〃 | 50日後 | 514 | 87 | 567 | 97 | 502 | 96 | 588 | 89 | 536 | 103 |
| 〃 | 60日後 | 534 | 90 | 516 | 93 | 472 | 95 | 561 | 89 | 699 | 123 |
| 〃 | 70日後 | 547 | 95 | 497 | 95 | 428 | 92 | 503 | 83 | 613 | 113 |
| 〃 | 80日後 | 507 | 94 | 427 | 88 | | | 461 | 85 | 527 | 106 |
| 〃 | 90日後 | | | | | | | 411 | 87 | 470 | 103 |
| 穂数(/m ²) | | 438 | 89 | 351 | 88 | 356 | 89 | 329 | 84 | 365 | 99 |
| 1穂籾数 | | 65.3 | 107 | 78.8 | 99 | 81.8 | 106 | 106.2 | 111 | 72.6 | 89 |
| 籾数(×100/m ²) | | 286 | 96 | 277 | 88 | 291 | 94 | 349 | 92 | 288 | 89 |
| 登熟歩合(%) | | 86.8 | 104 | 91.4 | 114 | 80.8 | 104 | 84.3 | 113 | 89.1 | 107 |
| 玄米千粒重(g) | | 21.6 | 99 | 22.2 | 100 | 21.9 | 97 | 21.6 | 99 | 22.3 | 100 |
| わら重(kg/a) | | 54.4 | 94 | 61.5 | 96 | 75.2 | 107 | 88.6 | 90 | 62.0 | 105 |
| 精籾重(kg/a) | | 69.5 | 98 | 71.6 | 96 | 67.8 | 92 | 82.8 | 97 | 74.2 | 96 |
| 屑米重(kg/a) | | 2.9 | 85 | 2.0 | 45 | 3.4 | 63 | 3.5 | 50 | 4.1 | 105 |
| 玄米重(kg/a) | | 53.6 | 99 | 56.1 | 100 | 51.4 | 95 | 63.7 | 104 | 57.2 | 96 |

注) 比較の欄は葉齢～成熟期については平年との差、他は対比(%)。平年値は品種、田植日により異なる。

3 検査概況

平成20年1月28日現在の検査数量は、42,534t(前年同期46,281t、前々年同期50,748t)。ただし、18年は1月29日、17年は1月27日のデータ、以下同様)で前年に比べ少なかった。種類別では、うるち米40,977t(前年44,308t、前々年48,123t)、もち米1,039t(前年1,394t、前々年1,811t)、醸造用米518t(前年579t、前々年814t)と、うるち米、もち米、醸造用米とも前年に比べ減少した。

うるち米の1等比率は75.4%で、近年では高い数字となった。これは「ハナエチゼン」と作付面積が急増した「きぬむすめ」の品質が高かったためと思われる。品種別では、作付けの3/4以上を占める「コシヒカリ」が69.7%(前年64.1%、前々年69.2%)で、ここ数年と同様に平坦部の等級低下が大きく、山間部との格差が大きかった。格下げの第1位理由は心白粒、第2位は未熟粒(19年10月31日現在)によるものであった。

乳白粒対策としては、引き続き平坦部全域と中山間地域で5月下旬田植えを推進しているが、田植えの最盛期は平年より1日早くなるなど、近年田植えが早くなる傾向は変わらず、今後の課題を残した。温暖化による生育の前進化は顕著であり、今後とも気象温暖化を踏まえた総合的な対策を進めていく必要がある。

なお、最大の等級格下げ要因は「ハナエチゼン」ではカメムシ、「コシヒカリ」では心白粒、「きぬむすめ」ではカメムシであった。

もち米の1等比率は37.6%(前年46.4%、前々年39.2%)で、前年に比べて低い結果となった。醸造用米の特上は0.6%、特等は6.4%と低かった。近年低下傾向にある。

表3. 平成19年産米の品種別検査概況 (JA全農しまね米穀課調べ)

| 種類 | 品種名 | 検査数量 (t) | 1等比率 (%) | 主な等級格付要因 |
|-----|--------|-------------|-------------|--------------------------|
| うるち | ハナエチゼン | 3,973 | 92.4 | カメムシ7.1、未熟粒1.4、心白粒0.4 |
| | コシヒカリ | 29,304 | 69.7 | 心白粒15.4、未熟粒10.2、胴割粒3.3 |
| | きぬむすめ | 7,200 | 90.3 | カメムシ7.7、未熟粒3.8、心白粒2.0 |
| | うるち計 | 40,977 | 75.4 | 心白粒12.1、未熟粒8.6、カメムシ4.4 |
| もち | ヒメノモチ | 602 | 29.7 | 未熟粒29.0、胴割粒17.8、発芽粒9.9 |
| | ココノエモチ | 352 | 57.4 | 未熟粒20.3、胴割粒16.6、カメムシ3.1 |
| | ヤシロモチ | 54 | 1.3 | 未熟粒42.3、胴割粒21.3、カメムシ14.7 |
| | もち計 | 1,039 | 37.6 | 未熟粒26.5、胴割粒17.8、充実度6.1 |
| 醸造用 | 五百万石 | 284 | 50.6 | 未熟粒54.9、胴割粒34.0、充実度8.1 |
| | 神の舞 | 77 | 76.2 | 未熟粒63.4、胴割粒27.1、他形質9.5 |
| | 佐香錦 | 51 | 76.4 | 未熟粒66.8、胴割粒27.7、充実度3.0 |
| | 改良雄町 | 51 | 88.7 | 未熟粒77.7、胴割粒22.3 |
| | 醸造用計 | 518 | 59.5 | 未熟粒64.0、胴割粒27.2、充実度5.6 |
| 合計 | | 42,534 | 74.3 | |

注) 平成20年1月28日現在。ただし、主な等級格付け要因は10月末日の状況。合計の1等比率は醸造用の特上～1等を含めた数値。

4 病害虫の発生状況

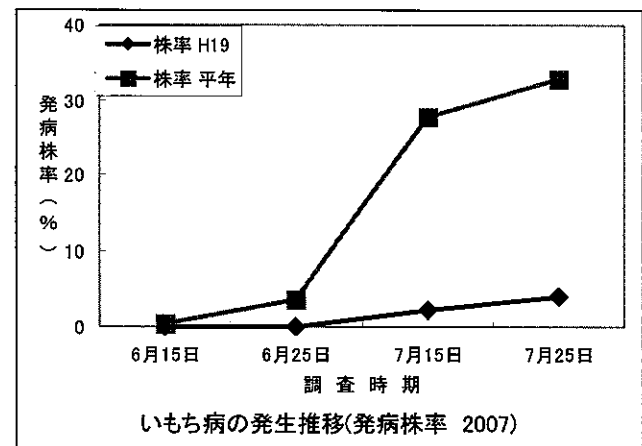
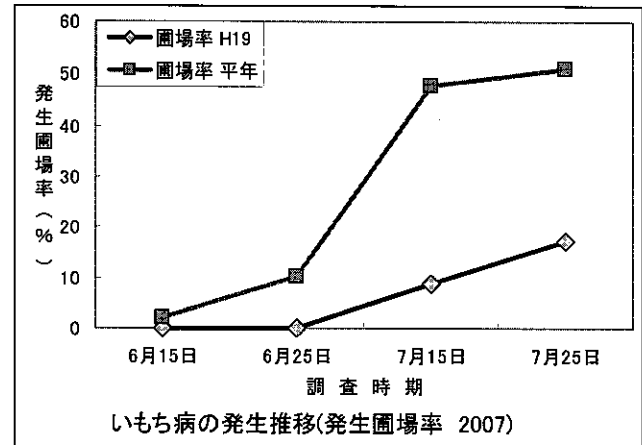
(1) 葉いもち

置き苗での発生地点率は0.0%（平成4.1%）と極めて低く、伝染源量は少ないものと推察された。BLASTAMによる6月の感染好適日の出現日数はのべ26日（平成12.6日）、7月にものべ77日（平成20.8日）と平年を大きく上回ったが、初期の伝染源量が少なく本病の初期進展に抑制的に作用したものと考えられる。このため、初発生は平年並みの6月15日に認められたが、初期の病勢は極めて緩慢であった。梅雨期には発病程度の高いほ場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なく推移し、7月下旬の平均発病株率は3.9%（平成32.9%）と平年を大きく下回った。

なお、前年MB I-D剤耐性菌の確認された地域では当該薬剤の使用が控えられた。

(2) 穂いもち

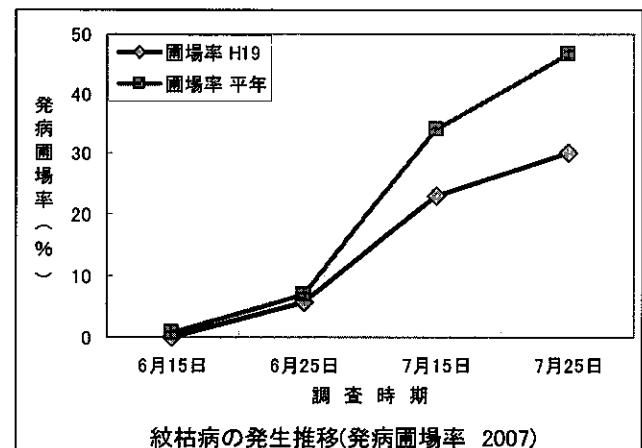
初発生は平年並みの8月6日であった。中山間地域では発病程度の高いほ場もみられた。生育が遅れたことにより感染しやすい期間がやや長く続いたものの、伝染源となる葉いもちの発生がやや少なかったため、

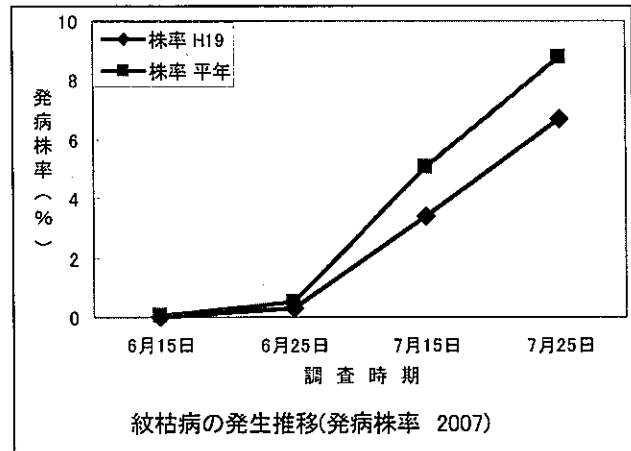


全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。

(3) 紋枯病

初発生は平年並みの6月14日に認められた。その後、梅雨期末期まで気温が低く推移し、イネの分けつが抑制されたことに加え、感染に好適な23℃以上となる日が続かなかったため病勢進展が緩慢となった。巡回調査ほ場では7月下旬以降病勢がやや活発化した。「ハナエチゼン」栽培ほ場では上位進展も活発で、止葉葉鞘にまで病斑形成した発病程度の高いほ場も散見された。主要品種の「コシヒカリ」を含む全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。





(4) セジロウンカ

予察灯での初飛来は平年並みの6月下旬から認められ、6～7月の飛来量は平年に比べてやや少なかった。第1世代幼虫は7月中旬から発生したが、気温が低く降雨が多かったため発生が抑制され、発生量は平年に比べてやや少なかった。

(5) トビイロウンカ

予察灯での初飛来は7月1日、その後6日までに県全域に飛来した。梅雨明けまでの飛来量は平年に比べて多かった。これに由来する幼虫は7月下旬から発生し、発生量は平年に比べてやや多かった。8月～10月上旬まで気温が高く経過し、増殖に好適な状況が続いたため、収穫時期が比較的遅い「きぬむすめ」を中心に9月下旬頃から坪枯れ被害が発生した。いもち病の発生が少なかったことから防除機会が減少したことも要因と考えられる。

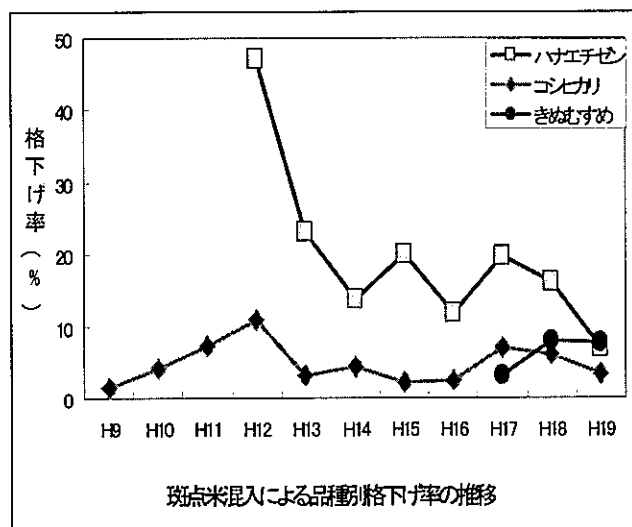
(6) コブノメイガ

梅雨明けまでの飛来量は過去10年で最も多く、これに由来する幼虫の被害が多発した。特に海岸部では被害が激しかった。次世代の発蛾盛期は8月第2半旬となり、発蛾盛期には大部分の水稻は出穂しており、その後の被害発生は少なかった。

(7) 斑点米カメムシ類

畦畔雑草すくい取り（6月下旬：頭数1.2頭/10回振・発生ほ場率33%、前年1.7頭・46%）では前年と同等の発生量であった。しかし、7月の気温は低く、降水量も多く経過し、雑草上での増殖、ほ場への侵入が抑制され、早生品種出穂時（7月下旬：5.1頭/20回振・59%、前年10.5頭・70%）の調査では、発生量は平年に比べてやや少なかった。

主な発生種はホソハリカメムシ、アカスジカスミカメであった。10月31日現在、うるち玄米総検査数量に対する、カメムシ類が原因の着色粒混入による格落ち数量割合は、「ハナエチゼン」7.1%、「コシヒカリ」



3.5%、「きぬむすめ」7.7%であった。

(8) アワヨトウ

6月27日、隠岐の島町、海士町の水稲1.5haに発生しているのが確認された。牧草畑(エン麦)に多発生した幼虫(黒化型)が歩行して隣接の水田に侵入した。実被害面積は10a程度であった。牧草では隠岐の島町のほか奥出雲町(6/26、スーダングラス)、出雲市上島町(6/28、デントコーン)で発生が確認された。秋田県の情報などから、飛来は5月下旬と推定された。

(曾田泰弘・板垣紀夫)

麦 類

1 生育期間における気象上の特徴（出雲市）

播種後から1月上旬までは平年に比べ気温は低く、日照時間は短く、降水量は多かった。1月中旬から3月中旬までは気温は高く、日照時間も長く、降水量は平年並みであった。4月から収穫期の6月上旬も気温は高く、日照時間も長く、降水量は平年並みであった。

2 生育状況

出芽・苗立ちは、降水量が多かったが湿害の発生はなく比較的良好で初期生育は平年よりやや進んだ。分けつの発生は初期はやや緩慢であったが、1月中旬以降は気温が高く、日照も比較的多く、適度な降水量であったため回復し、順調に増加した。暖冬のため、幼穂形成は早く、出穂期、成熟期も早まった。登熟～成熟期は好天で、品質は比較的良好であった。

3 作付面積および作柄概況（六条大麦、裸麦を除く子実用）

| | 年産 | 作付面積 (ha) | | | 収穫量 (t) | | | 収量 (kg/10a) | | |
|------|-------|-----------|---|-----|---------|----|-------|-------------|-----|-----|
| | | 田 | 畑 | 計 | 田 | 畑 | 計 | 田 | 畑 | 平均 |
| 小麦 | 平成16年 | 95 | 7 | 102 | 213 | 16 | 229 | 224 | 230 | 225 |
| | 平成17年 | 91 | 6 | 97 | 207 | 13 | 220 | 227 | 230 | 227 |
| | 平成18年 | 103 | 3 | 106 | 193 | 6 | 199 | 187 | 194 | 188 |
| | 平成19年 | 110 | 2 | 112 | | | 276 | | | 246 |
| 二条大麦 | 平成16年 | 395 | 0 | 395 | 1,220 | 0 | 1,220 | 310 | 290 | 310 |
| | 平成17年 | 367 | 0 | 367 | 1,320 | 0 | 1,320 | 359 | 260 | 359 |
| | 平成18年 | 430 | 0 | 430 | 1,080 | 0 | 1,080 | 252 | 110 | 252 |
| | 平成19年 | 467 | 0 | 467 | 1,550 | 0 | 1,550 | 331 | | 331 |

注) 農林水産省ホームページより、空欄はデータなし。

4 検査状況

| | 年産 | 検査数量 (t) | 等級比率(%) | | |
|--------|-------|-------------|---------|------|------|
| | | | 1等 | 2等 | 規格外 |
| 小麦 | 平成16年 | 205 | 3.0 | 81.1 | 15.9 |
| | 平成17年 | 199 | 100 | | |
| | 平成18年 | 186 | 4.3 | 95.7 | |
| | 平成19年 | 263 | | 96.2 | 3.8 |
| ビール麦 | 平成16年 | 350 | | 100 | |
| | 平成17年 | 350 | 14.3 | 85.7 | |
| | 平成18年 | 350 | | 100 | |
| | 平成19年 | 350 | | 100 | |
| 普通大粒大麦 | 平成16年 | 873 | 97.4 | 1.7 | 0.9 |
| | 平成17年 | 958 | 99.5 | | 0.5 |
| | 平成18年 | 720 | 99.3 | | 0.7 |
| | 平成19年 | 1,179 | 98.8 | 1.2 | |

注)島根農政事務所資料より

5 病害虫の発生状況

(1) 赤かび病

巡回調査地点における5月中旬の発生量は、発生ほ場率1.6% (平年8.3%)、発病茎率は0.02% (平年0.69%) で平年に比べてやや少なかった。

(2) さび病類

大麦、小麦ともに発生がみられた。3～4月に気温がやや高く、降雨が少なかったため発生が助長され、4月以降病勢はやや活発となった。5月中旬の発生量は、発生ほ場率9.7% (平年4.7%)、発病茎率6.2% (平年1.4%) となり、平年に比べてやや多かった。

(曾田泰弘・板垣紀夫)

大豆

1 気象および生育の概況

播種前から播種期は降水量が少なかったが発芽、初期生育は順調であった。6月下旬からは降雨の日が多くなり、一部では湿害の発生や中耕培土ができないため雑草が繁茂したほ場も見られた。また、播種が遅れたほ場では梅雨明け以降の7月下旬は種となった。

開花期は平年に比べ2～4日遅れ、草丈が短く、分枝数の少ない生育となった。梅雨明けの7月下旬から8月中旬は、一転して高温となり晴天が続く生育はやや回復した。8月下旬から9月上旬は日照はやや少なかったが気温は平年並みからやや高め、降雨が頻繁にあり着莢、莢伸長は比較的良好であった。

9月中旬以降、成熟期までは気温が高く推移し、晴天が多く、降水量も適度にあり子実肥大は良好であった。

2 作付面積および収穫量

大豆作付面積は1,260haで前年並みであった。10a当たり収量は141kgで、平均収量対比は110%となり、近年では良い作柄であった。収穫量は1,780tで、前年より多かった。

表1. 大豆の作付面積および収穫量

| 年 産 | 作付面積 (ha) | 10 a 当たり収量 (kg) | 収穫量 (t) | 平年収量対比 (%) |
|-------|--------------|--------------------|------------|---------------|
| 平成15年 | 1,390 | 109 | 1,520 | 75 |
| 平成16年 | 1,240 | 86 | 1,070 | 60 |
| 平成17年 | 1,240 | 104 | 1,290 | 75 |
| 平成18年 | 1,260 | 123 | 1,550 | 94 |
| 平成19年 | 1,260 | 141 | 1,780 | 110 |

注) 農林水産省ホームページより

3 検査概況

品質は全般に良好で、数量を前年と比べると普通大豆の1等、2等が大幅に増加した。格下げ理由は汚損粒が44.2%と多く、次いで未熟粒24.3%、皮切れ粒22.4%となっている。

表2. 平成19年産大豆の検査成績

| 種類 | 検査数量 | 1等 | 2等 | 3等 | 合格 | 規格外 |
|---------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| 普通大豆 | 423トン | 24.3% | 28.5% | 47.1% | | 0.1% |
| 特定加工用大豆 | 125トン | | | | 99.7% | 0.3% |
| 合計 | 548トン | | | | | |
| 数量対前年比 | 126% | 496% | 128% | 65% | 101% | |

注) 島根農政事務所調べ(平成20年1月31日現在)

4 病害虫の発生状況

(1) ハスモンヨトウ

フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで平年並～やや多かった。その後、累積誘殺数は9月末には平年の7割程度とやや少ない飛来であった。ほ場での幼虫の発生は8月中旬からみられ、1a当たりの白変葉箇所は9月末には6箇所以上観察されるほ場もみられたものの、全般には1.7箇所と平年(2.6箇所)よりやや少ない発生であった。9月の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量もやや少なくなったものと考えられる。また、8月下旬から9月上旬の大雨も幼虫の発生を抑制したと考えられる。

(2) ミナミアオカメムシ(新発生)

ミナミアオカメムシは暖地性の害虫で、温暖化により分布域を拡大していると考えられている。最近では福岡県、大分県、静岡県で初発生が確認されている。10月に行ったダイズほ場のカメムシ調査で本種の発生が確認された。現在、浜田市、江津市、大田市、雲南市で発生が確認されている。

(曾田泰弘・板垣紀夫)

野 菜

1 気象と野菜全般の生育概要

冬季の気象状況は、1月から2月にかけて気温は高く推移し、暖冬となった。その影響を受け露地野菜を中心に収穫期は前進化した。

3月から5月にかけても気温は高く、降水量は少なく推移したため、メロン、トマトの生育は良好で、病害も少なかった。

梅雨入りは平年より遅い6月14日頃で、梅雨明けは7月23日頃であった。7月の日照時間は平年の半分近くと著しく短くなった。そのためメロン等の果菜類の生育が抑制された。しかし、同時に低温に推移したため、トマトの半促成栽培では作期後半の樹勢低下が少なく、収量は増加した。

8月から9月は、猛暑となり、露地野菜はキャベツ等で定植時の活着不良、ブロッコリーの生育停滞が見られた。

10月以降も平年より高い傾向が続き、露地野菜全般の生育が抑制された。

2 メロン

アムスメロンは、育苗が開始される2月から3月上旬まで好天が続き高温傾向となり、早期作型の定植は順調に行われ、活着は良好であった。3月中旬には寒波により低温傾向となったが、大きな障害はなく初期生育は順調に推移した。4月から5月にかけても好天が続き、一般的に生育は順調で玉肥大は良く、品質面においてもネット発生、糖度とも良好な仕上がりとなった。

夏作アールスメロンは、4月から5月にかけて好天であったため、生育は順調で7月上中旬出荷のものは玉肥大、ネットの発生とも良好であった。7月下旬以降出荷されたものについては、6月下旬からの日照不足・長雨の影響を受け小玉傾向となったほか、糖度上昇が遅れた。

秋作アールスメロンは、8月～10月中旬まで高温乾燥で大玉傾向となったが、草勢の低下もあるなどネットは細かな盛り上がりの悪いものとなった。また、高温の影響による黄化玉の発生もあるなど外観は悪くなったが、好天により糖度は高く内容的には良いものが出荷された。

3 青ねぎ、ほうれんそう

青ねぎは、出雲地域、雲南地域を中心に生産されており、近年、栽培面積が増加している。

春作は、5月に乾燥傾向となった影響と日較差が大きいことから葉先枯れ症状が散発した。

夏作は8～9月に高温となった影響で発芽不良や葉先枯れ等の症状が多発し、収量がやや伸び悩んだ。

秋作は11月中旬に低温をうけたが、以降は暖冬傾向により概ね順調な生育となった。病害虫では軟腐病の発生が問題となった。

ほうれんそうは、県内各地で生産されているが、夏期高温で中山間地の収量が伸び悩んだが台風等の大きな被害もなく概ね順調な生育であった。

4 たまねぎ

たまねぎは、斐川町や益田市を中心に栽培されているが、栽培面積の減少が続いている。

平成19年産は、昨年10～11月にかけて育苗期間に暖冬となったため、生育が促進され大苗に生育となった。2月の高温、4月～5月に日照が多かったため、抽たいが多かったものの、玉肥大が促進されたことから大玉傾向となり、平均反収5.5 tと出荷量が前年より増大した。収

穫期は比較的天候に恵まれ地干し・乾燥は順調に行えた。

黒かび病の発生は、貯蔵開始から7月まで低温傾向であったため、8月中旬までは少なかった。8月以降は猛暑となり貯蔵中の気温が高くなったため、黒かび病が発生したものの、基幹防除や乾燥技術の徹底により、昨年よりも発生が少なく規格品の割合が向上した。

5 キャベツ

秋冬作の1～3月は、暖冬で順調な出荷があった一方、全国的な生産過剰で販売単価は大幅に下落した。

続いて出荷された4～6月出荷の春・初夏取りキャベツは、一時期雨不足などがあったものの、概ね順調な生育で平年並の出荷であった。

7～10月出荷の平坦地域の夏秋キャベツは、前半は生育の前進化による前月への前倒し出荷となり、また、後半は定植期に猛暑・干ばつの影響を受けるなどして期間全体としては出荷が減少した。一方中山間地域は、梅雨入り後の降雨や8月の猛暑・干ばつなど気象の変化を経過したものの、生育は概ね順調で期間を通じて順調な出荷であった。

年内出荷の秋冬作では、8月上旬は猛暑・干ばつが、下旬には大雨と、定植期間を通じて気象の影響を受けたため、苗の枯死や生育停滞などの障害や、作付け不能ほ場や作物の流失などが発生したため、その後の暖冬傾向にも関わらず年内の出荷は平年を下回った。

6 病害虫の発生状況

(1) 夏秋キャベツ

ア 黒腐病

9月下旬になって発生が見られるようになったが、台風等による傷害の発生が少なく降水量も少なく、発生には抑制的で全般の発生量はやや少なかった。

イ ハスモンヨトウ

フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで平年並み～やや多かった。その後、累積誘殺数は9月末には平年の7割程度とやや少ない飛来であった。ほ場での幼虫の発生は9月上旬からみられ、発生量は平年に比べてやや少なかった。

(山本晃二・遠藤義明・松本修司・石川真治・板垣紀夫)

花 き

1 気象と花き全般の生育概要

本年の特徴としては、気温は概して高く推移したが、台風や大雨による大きな被害はなかった。しかし、夏秋期の高温は、トルコギキョウ、ストックでは開花期の大幅な前進化や、シクラメンでは開花遅延等、各品目の生育、開花に大きな影響を及ぼした。また、梅雨時の記録的な低日照は、トルコギキョウでは、蕾が開花しない‘ブラスチング’の発生を助長し、開花期に影響を及ぼした。秋冬期も気温は高めに推移し、低温により着色が促進されるセンリョウでは、着色の遅れが目立った。

2 キ ク

(1) 輪ギク

夏秋ギクは、初期生育は比較的順調であったが、梅雨明け以降の高温や強日射などにより、品種によっては、花卉のねじれや貫生花の発生がみられた。

秋ギクは、昨今の重油高騰などの影響で、全国的に冬期の出荷産地が減少傾向にあることから、11～12月における白輪ギクの市場単価が急騰した。

本年は、10～12月出荷の作型で、無側枝性の低温開花性・白輪ギク品種「新神」の導入が拡大した。この品種は、昼温30℃、夜温25℃の高温条件で側枝が消失し、無側枝性を発揮するが、10月出荷の作型では、6～7月の低温・曇天などにより、側枝が多く発生した。また、10～11月上旬出荷の作型では、8～9月の強日射などにより、管状花が増加し花芯が露出する‘露心花’が多く発生した。11月中旬～12月出荷の作型では、側芽が多く発生したものの、気象条件による切り花品質への影響はみられなかった。

(2) 小ギク

8月出荷の作型では、春先の低温や降水量不足などにより、初期生育が著しく遅れた。また、6月以降も、高温・乾燥条件が続いたため、各地で根傷みやカルシウム欠乏に起因すると思われる‘葉焼け’が発生した。7月は、集中雨により、根腐れや下葉枯れ、褐斑病といった生育障害や病害の発生が目立った。また、この時期は、日照時間が少なかったため、産地や品種によっては開花の遅延がみられた。

9月以降出荷の作型では、定植後の乾燥などの影響により、生育にばらつきがみられたほか、7月の降雨により、根腐れや葉の枯れ上がり、褐斑病が発生した。発蕾は8月の高温・強日射などの影響により早まる傾向にあったが、出荷時期はほぼ平年並となった。

3 バラ

バラの主産地である県西部地域では、1～2月の降雪量が平年より少なく、気温も高めに推移したことから、冬期の生育は比較的順調であった。また、近年の加温経費高騰の影響で、冬季一時休眠作型の導入や加温温度を下げるなどの取り組みが拡大した。

春先は、3月中旬の低温の影響により開花が遅延したことから、出荷は4月に集中した。

夏期は、7月上中旬の降水量が多かったことなどから、一部生産者ほ場でべと病が発生し、出荷量の減少を招いた。

9月以降は、バラ生産に比較的適した状況であり、生育も順調であった。

4 トルコギキョウ

本年は、1～3月の日照時間が長く、気温も高めに推移し、トルコギキョウの育苗には好適な条件であった。しかし、育苗トンネル内が高温になりやすく、一部では高温、乾燥による育苗率の低下もみられた。

3～4月は県オリジナル品種の定植時期にあたるが、この間も気温は高めで、活着は良好であった。しかし、5月に入ると一部産地では、育苗期の高温管理に起因するものと考えられる茎が伸長しない‘ロゼット’が例年より多くみられた。

6月下旬～7月下旬は記録的な日照不足となり、この時期に花蕾の発達時期を迎えた品種、特に八重品種では、‘ブラスチング’と呼ばれる、蕾の枯死が多発し、草姿のバランスが不良となると共に、開花期も大きく遅れた。また、この時期に発蕾期を迎える7～8月出しの県オリジナル品種についても、低日照による側枝、花蕾数の減少や花の小型化、開花の遅れ等が生じた。一方、この時期が定植時期となる秋出し栽培では、定植時の低日照と涼温により、活着は良好であった。

梅雨明け後は、一転して高温となり秋期も気温は高く推移したことから、秋出しの生育はやや軟弱傾向で、開花も早まった。特に中山間、高冷地の産地では、6～7月の低日照による開花の遅れと夏秋期の高温による開花の前進化で、出荷期が短期間に集中する結果となった。

病虫害の発生については、春の定植期及び夏～秋にかけて、コガネムシの幼虫による根の食害被害が目立った。ヨトウ、タバコガ等の夜蛾類については、黄色蛍光灯の普及により被害は減少する傾向にある。一方、連作によるフザリウムによる立ち枯れや青かび根腐病の発生は年々多くなってきており、対策が急がれる。

5 シクラメン

平成19年産シクラメンの育苗期は、平年に比べて比較的気温が高く、日照時間も多い傾向にあったが、追肥施用の加減により、概ね平年並みの生育量に抑えながら順調に推移した。

定植期である6月中旬～7月中下旬までの梅雨期は、低温寡日照条件が続いたが、病虫害の発生・被害も少なく、株間隔を十分に確保することで葉柄の徒長もおさえられた。

しかし、梅雨明け以後は急激な猛暑となり、蒸散の激しい日中において葉が軟化する症状が各地域で多数見受けられ、炭疽病等の病害ロスも多かった。また、9月下旬までの残暑は、シクラメンの花芽形成を阻害し、開花の遅延を大きく助長した。

10月以降は、比較的天候に恵まれ、夜温も平年に比べ高めで推移したことから、ほとんどの生産者において加温に要する重油の消費量は平年よりも少なかった。しかし、残暑の影響により出荷始め・出荷ピークは、平年に比べ概ね10日程度遅れ、晩生系品種については年越しする数量が例年に比べ多かった。

なお、19年産シクラメンの出荷率は84%と近年では最も高く、高温による開花遅延や病虫害による生産ロス等の影響を除けば、全般的には比較的順調な生育であった。

(稲村博子・石井満彦・松山朋子)

果 樹

本年の冬期は冬型の気圧配置が弱く、高気圧に覆われ晴れの日が多く、特に2月は最高気温が13～15℃となるような日が続き、日照時間も平年の50%以上多い状況となった。3月に冬型の気圧配置が強まった時期もあったが、6月中旬までは全般に気温が高く、降水量は少なく、日照時間は平年よりかなり多く好天が続いた。6月下旬から7月は梅雨前線の影響で雨や曇りの日が続き、特に日照時間のほとんど無い日が数日続くなど、それまでから一転した気象条件となった。梅雨明けは平年より数日遅い7月23日であったが、8月に入ると連日最高気温が30℃を越す猛暑となった。

このような気象状況で経過するなか、19年産の春夏果実の出荷状況は、暖冬により大幅な前進出荷と豊作が予想されたが、品目間で格差のある状況となった。

巨峰、デラウェア等ぶどう類は前進出荷の傾向であったが、桃、桜桃等は平年並みの出荷となり、特に最大の競合である桜桃は開花期の天候等の理由から前年を大きく下回る出荷量となった。7月に出荷されたものは食味等品質面の低下が著しく販売状況が厳しいものとなった。

1 生育状況

(1) ぶどう

ア デラウェア

冬季の最低気温が高く、ぶどうの発芽に必要な低温遭遇時間が少なかったことから、早い作型での生育障害が心配された。発芽不良、花ぶるいは一部の園に見られた程度であったが、花穂は全般に小さかった。生育は1、2月の気温がかなり高く、日照条件も良かったことから、超早期、早期加温栽培とも平年より5～7日程度進んだ状態で経過し、その後の生育も順調であったことから、収穫時期は7日程度前進出荷となった。したがって、今年の出荷ピークは6月上中旬となった。

品質面では、超早期、早期加温栽培は、花穂が小さかったことから小房傾向となった。また、6月下旬以降は梅雨前線の影響で降水量が多く、裂果などが多発したが、全体に前進出荷となったことから、全体に及ぼす影響は少なかった。

イ 巨峰など

デラウェアと同様に、春の天候が良かったことから、早い作型は順調な生育をし、生育進度もデラウェアと同様に1週間程度早まり、花ぶるいも少なく、果実品質も良好となった。

しかし、6月下旬から7月は梅雨前線の影響で、降水量が多く、裂果が多発し、7月下旬出荷以降の作型では壊滅的な被害を受けた園も見られた。

第1表 デラウェア（作型別）及び大粒系ぶどうの栽培状況 単位：a、%

| 作型 | | 平成19年度 | 平成18年度 | 前年比 |
|--------|-----|---------|---------|-----|
| 加 温 | 超早期 | 2, 445 | 2, 244 | 109 |
| | 早期 | 5, 814 | 6, 092 | 95 |
| | 普通 | 7, 693 | 8, 519 | 90 |
| | 準 | 1, 539 | 1, 594 | 97 |
| | (計) | 17, 491 | 18, 449 | 95 |
| 無加温 | | 3, 770 | 3, 896 | 97 |
| 露地 | | 523 | 617 | 85 |
| 大粒系 | | 2, 263 | 2, 296 | 99 |
| 合計 | | 24, 047 | 25, 258 | 95 |

* J A全農しまね資料より

(2) かき

2月までは暖冬であったため生育がかなり早くなると予想されたが、3月は一転して低温となり足踏み状態となった。地域によってはウソによる芽の食害があった。

4月にも低温の時期があったものの生育は順調に進んだ。5月17・18日には強風が吹き、北向きの風当たりの強い園では葉がかなり傷んだ。被害の少ない園でも樹上部の葉は少なからず傷害を受けた。

島根県農業技術センターの西条柿園では開花始めが5月25日、開花盛期が5月28日であり、平年より3～4日早かった。6月下旬から7月中旬までは寡日照・多雨の気象状況であり、やや早期落果があった。甘柿で多く見られた二次伸長は西条では比較的少なかった。

8月は猛暑が続いたため、日が当たる果実面の日焼けが目立った。この時期の果実肥大は平年並みであった。9月は残暑が厳しく、気温が平年に比べ高かったため果実の着色が遅れた。また、この高温により果実肥大の抑制が懸念されたが、降雨が適度であったため果実の肥大は良好であった。収穫は果実着色の遅れにより平年に比べ2週間程度遅くなり、収穫最盛期は早生系が11月上旬となった。

病害については、落葉病やうどんこ病が多発した他に、黒点病、黒ずじ病が発生した。

害虫は、フジコナカイガラムシが例年と同じように多発している。昨年多発したカメムシは8月まで被害が少なかったが、収穫前に多発した。他にチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、サビダニも発生している。また、本年は全県的にヒロヘリアオイラガが多発し葉の食害がみられた。

(3) なし

開花期の4月は昨年と対照的に好天に恵まれたが、極端な暖冬で品種ごとの開花期がずれただため、人工授粉の有無で着果に大きな差が生じた。

昨年日照不足の影響で花芽数が不足気味であったため、人工授粉をしなかった生産者は着果不良に見舞われ、減収要因になった。

5月から6月中旬にかけても、晴れた日が多く、気温が高く、降水量が少なかったため、病害発生は少なく、生育は順調であった。

6月下旬からは雨や曇りの日が続き、梅雨明けは平年より遅れたが、梅雨入り時点での病害発生が少なかったことに加え、毎年、病害が発生しやすい時期であるため防除が徹底され、大きな被害は見られなかった。

8月に入ると県東部の産地では猛暑が続いたが、8月下旬以後は時々まとまった降雨があり、厳しい水不足とはならなかったため、果実肥大も良好に推移し、収穫期を迎えた。

一方、県西部の産地は、8月上旬の降水量が県東部産地の2倍程度あったため、平年は見られない、8月中旬の果実への黒星病被害が多発し、大きな減収要因となった。

(4) いちじく

極端な暖冬でかなり生育が進むと思われたが3月に入ってから低温が続いたため発芽は平年より2～3日早い程度であった。その後の着果始め時期も平年よりやや早くなり順調な生育であった。

6月下旬から7月中旬まで1ヶ月間日照時間が極めて少なく、低温で推移した。そのため、新梢数が多い園では樹冠内部が暗くなり着果が極めて不良となった。

いちじくは着果始めからの積算気温で成熟日が決まる。19年産は、梅雨期間が低温で推移したため収穫開始が平年より遅くなった。

梅雨明け後から10月までは日照時間が長く、高温であったため平年なら成熟しないまま冬を迎える果実まで成熟した。また、台風被害は無かった。

病虫害では疫病、かっぱん病等が見られ、病害が発生しやすいドーフィンの下位節の果実は収穫できないものが多かった。近年発生が多いハダニ類の発生は少なかった。台風被害は無かった。

2 生産・販売状況

(1) ぶどう

19年産の島根ぶどうは4月20日から出荷開始となった。年明けから天候が良く初出荷は近年になく出荷量が増加した。以降5月中旬から出荷が本格化し5月の出荷量が500tを越えるものとなり、前進出荷が顕著となった。6月上中旬が出荷の最盛期となり、7月の出荷量は出荷遅れが著しかった前年の半分以下となった。出荷当初は小房傾向で早期加温の作型まではMおよびパックの比率が高い傾向にあった。

品質面では、食味重視期間を設け出荷早期の良食味の徹底を図り評価を受けた。一方で5月末から6月上旬にかけて酸切れの悪さを指摘される場面があった。本年は出荷当初から規格外の集荷を行なったが、花ぶるいの影響等で昨年は多かった青規格以下の出荷比率が大幅に下回った。6月末からは梅雨本番となり品質の低下が避けられなかった。

販売状況は、出荷予測調査をもとに出荷予測情報を取引先に発信し、本年の前進出荷の状況から5月中旬から6月上旬に消費宣伝活動、販売キャンペーンを集中実施し売場確保に努めた。6月中旬に荷動きの悪い場面が見られたが、6月下旬からは降雨による品質低下が見られたものの、引き合いの強い状況が7月いっぱいまで続いた。

大粒系は前進出荷傾向で7月上旬までは順調な出荷となったが、6月末からの天候不順の影響で出荷の中心となる7月下旬からは大幅減少となり、出荷計画を下回る状況となった。

このような状況のなか、平成19年産島根ぶどうは9月20現在、出荷量2,326t（前年比101%）、販売額21億9千万円（前年比106%）、平均単価942円（前年比105%）となった。内、デラウェアは、出荷量2,267t（前年比102%）、販売額21億3千9百万円（前年比106%）、平均単価944円（前年比104%）の実績となった。

第3表 デラウェアの年次別栽培面積と出荷量（単位：面積ha、出荷量t、反収kg）

| | | | | | | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 63年 | 元年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 7年 | 8年 | 9年 |
| 面積 | 404.9 | 392.9 | 383.9 | 367.9 | 349.2 | 341.3 | 320.2 | 319.6 | 303.6 | 297.0 |
| 出荷量 | 3,868 | 4,049 | 3,523 | 3,000 | 3,007 | 3,087 | 2,847 | 2,917 | 2,680 | 2,614 |
| 反収 | 955 | 1,031 | 918 | 815 | 861 | 904 | 889 | 918 | 883 | 880 |
| | 10年 | 11年 | 12年 | 13年 | 14年 | 15年 | 16年 | 17年 | 18年 | 19年 |
| 面積 | 290.4 | 288.1 | 268.8 | 263.1 | 257.8 | 260.7 | 258.8 | 247.0 | 229.6 | 217.8 |
| 出荷量 | 2,241 | 2,403 | 2,556 | 2,476 | 2,460 | 2,457 | 2,537 | 2,370 | 2,228 | 2,267 |
| 反収 | 772 | 834 | 951 | 641 | 954 | 942 | 980 | 959 | 970 | 1,041 |

* J A全農しまね出荷反省会資料より

(2) かき

残暑が厳しかったため収穫期が遅れ、10月の出荷量は少なく高単価となった。11月になるとやっと成熟し出荷が集中した。また、適度な降雨と気温が高めで推移したため果実肥大が良好となり出荷量も計画を上回った。このため11月の単価は安く推移した。最終出荷量は前年対比113%となった

次年度へ向けた課題としては、おいしい果実の生産（食味の向上）、大玉生産・収量の確保、果実軟化防止、病虫害の適期防除、気象変動に対応した柿づくり、優良系統等への更新、あんぼ柿加工の拡大、出荷計画（出荷量等）の精度向上などがある。

19年産西条柿の時期別出荷状況

単位：kg、%

| 時期 年度 | 9月 | 10月 | | | 11月 | | | 12月 | 合計 |
|----------|-----|--------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|---------|
| | 下旬 | 上旬 | 中旬 | 下旬 | 上旬 | 中旬 | 下旬 | 上~下旬 | |
| 19年 | 295 | 5,930 | 56,515 | 153,662 | 225,027 | 175,455 | 53,402 | 16,280 | 686,567 |
| 18年 | 80 | 24,645 | 147,875 | 180,525 | 162,657 | 70,535 | 13,937 | 7,145 | 607,400 |
| 対比 | 369 | 24 | 38 | 85 | 138 | 249 | 383 | 228 | 113 |

* J A全農しまね出荷反省会資料より

(3) なし

18年産は、春以降の多雨・日照不足で収量・品質が大きく低下したが、19年産は大きな気象災害がなかったため、出荷量・単価とも向上した。

赤梨主体の県西部の産地では、あまり人工授粉が行われなかったため、着果不良園が多かった。

また、県西部産地は、8月中旬に果実への黒星病被害が多発したため、青梨に比べて、赤梨の伸びが少ない結果となった。

| | 青梨 | | | | 赤梨 | | | | 計 | | | | |
|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|----------|-----|-----|
| | うち二十世紀 | | | | うち幸水 | | うち豊水 | | | | | | |
| | 出荷量(t) | 単価(円) | 出荷量(t) | 単価(円) | 出荷量(t) | 単価(円) | 出荷量(t) | 単価(円) | 出荷量(t) | 単価(円) | 販売額(百万円) | | |
| H19 | 90 | 252 | 93 | 252 | 47 | 254 | 40 | 301 | 105 | 274 | 198 | 264 | 52 |
| H18 | 70 | 225 | 73 | 226 | 44 | 275 | 36 | 264 | 111 | 268 | 184 | 251 | 46 |
| 対比(%) | 129 | 112 | 127 | 112 | 108 | 92 | 111 | 114 | 95 | 102 | 108 | 105 | 113 |

* J A全農しまね資料より

(4) いちじく

19年産は、7月下旬以降の気温が高く、日照時間が長く、降水量が少なかったため、平年なら成熟しないまま冬を迎える果実も収穫できた。また、降水量が少なめだったことからロス果は比較的少なかった。そのため、蓬莱柿は豊作だった昨年、一昨年を上回り、栽培が始まって以来最高の販売量となった。一方、ドーフィンでは下位節で病気が発生したため昨年の76%の販売量にとどまった。

表 J Aいずものいちじく販売実績

| | 蓬莱柿 | | ドーフィン | |
|-----|-----|-----|-------|-----|
| | 販売量 | 販売額 | 販売量 | 販売額 |
| | t | 百万円 | t | 百万円 |
| H16 | 123 | 75 | 23 | 11 |
| H17 | 157 | 91 | 36 | 17 |
| H18 | 155 | 101 | 38 | 20 |
| H19 | 178 | 108 | 29 | 14 |

3 病害虫の発生状況

(1) なし

ア 黒斑病

4月～6月中旬まで降水量が少なく、発生量は少なく推移した。7月には降水量が多く病勢が活発化し、平年並みの発生量となった。

イ 黒星病

平年より早い4月下旬に初発生が確認された。前年の発生量が多く伝染源は多いと推察されたが、4月から6月中旬の降水量が少なく推移し全般の発生量は平年並みとなった。

ウ ハダニ

カンザワハダニの越冬量はやや少なかったが、4月下旬の花叢への寄生率はやや高かった。その後、5月下旬の基幹防除、7月および8月下旬には降雨も多く密度が抑制された。全般の発生量は平年に比べてやや少なくなった。

エ アブラムシ

4月上中旬の気温が低く経過したため、初期の発生量はやや少なかった。5月下旬には薬剤防除も相まって寄生新梢率、寄生程度とも低下した。その後、降雨等の影響もあり全般の発生量は平年に比べてやや少なく推移した。

(2) かき

ア 炭疽病

全般の発生量は平年並みであった。

イ うどんこ病

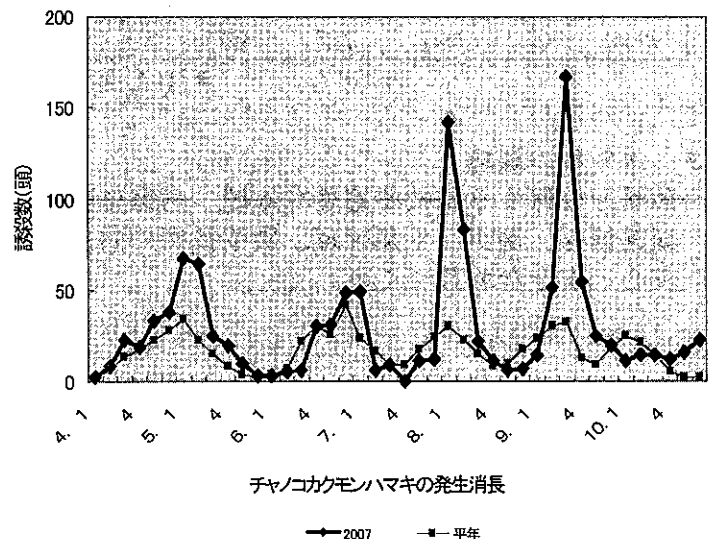
6月下旬に初発を確認した。8月下旬までの発生量は平年並みで推移した。9月は降水量が少なく感染に抑制的であったため9月下旬の発生量はやや少なくなったと思われる。

ウ カメムシ類

フェロモントラップでは5月7日に、予察灯では5月17日から誘殺された。その後、7月の降雨及び低温の影響からかカメムシ類の誘殺数は平年より少なく推移した。予察灯では8月下旬から9月上旬にかけて誘殺数の増加したが誘殺数は平年並みであった。果実被害は8月下旬から認められ、被害量は平年に比べて少なかった。

エ チャノコカクモンハマキ

フェロモントラップでのチャノコカクモンハマキの誘殺数は、越冬世代、第1世代では平年並～やや多い程度であった。8月以降は気温が高く降水量が少なく推移し、第2世代、第3世代成虫の誘殺数は極めて多かった。また、第3世代幼虫期の10月以降も気温が高く推移し幼虫の活動は活発であったと思われる。このため、幼虫による被害もやや多かった。越冬伝染源が少なく発生時期はやや遅かった。その後の病勢は全般に緩慢であり、発生量は平年より少なかった。



(山本孝司・小室正夫・神城文典・長岡義治・板垣紀夫)

茶 樹

1 生育状況

3月に一時低温の時期があったものの温暖に推移したため、生育は順調であった。多くの園で芽数が多く新芽の生育の揃いも良かった。

4月19・20・29日に気温が低下し、霜害が一部で発生した。特に4月29日の被害が目立った。

一番茶の摘採は4月28日から始まったが、多くの産地では5月5～7日頃から摘採が始まっている。摘採は比較的順調に行われたが、摘み遅れの園も多かった。

二番茶は、生育の揃いが悪く、また降雨が続いたので摘採が予定どおり行えず出荷量が少なくなった。

9月以降は高温で推移したために、秋番茶は増産となった。

害虫の発生は比較的少なかったが、毎年多発しているチャノホソガは本年も多発した。夏の高熱時にはハダニの発生した園もあった。

病害については、梅雨期には多雨で日照時間が少なかったことにより炭疽病が多発した。

2 生産・販売状況

一番茶の出荷量は、摘採遅れなどでほとんどの産地で増産となり、前年対比109%であった。

二番茶の出荷量は昨年対比47%と大幅な減産となった。

J A全農しまねの出荷量は38,266kg（前年対比92%）、取扱金額は3,899万円（前年対比89%）、平均単価は1,019円（前年対比89%）となった。

19年産島根緑茶販売実績

単位：kg、%

| | 一番茶 | | 親子番茶 | | 二番茶 | | 合計 | |
|-------|--------|-------|-------|-----|--------|-----|--------|-------|
| | 数量 | 単価 | 数量 | 単価 | 数量 | 単価 | 数量 | 単価 |
| 平成19年 | 24,737 | 1,319 | 8,790 | 463 | 4,739 | 483 | 38,266 | 1,019 |
| 平成18年 | 22,680 | 1,690 | 8,861 | 522 | 10,006 | 447 | 41,547 | 1,142 |
| 対比 | 109 | 78 | 99 | 89 | 47 | 108 | 92 | 89 |

* J A全農しまね出荷反省会貸料より

3 次年度の課題

葉層を確保する整枝や適度な施肥、病虫害防除による収量品質向上。

適期摘採、適正な生葉管理、製茶技術の向上。

安心・安全なお茶づくり。

(神城文典)

造 林

1 水害

隠岐地方において8月30～31日に発生した記録的大雨により、造林地の崩壊・流出などの被害が発生した。

造林地の被害は、隠岐の島町・海士町・西ノ島町・知夫村の隠岐全町村で発生し、合計41件・1.79ha・2,700千円の直接被害となった。

表 1 大雨被害による造林地の崩落被害状況

| | 隠岐の島町 | 海 士 町 | 西ノ島町 | 知 夫 村 |
|------------|-------|-------|------|-------|
| 崩落箇所数(カ所) | 14 | 8 | 18 | 1 |
| 崩落面積(ha) | 1.09 | 0.18 | 0.46 | 0.02 |
| 推定被害金額(千円) | 1,780 | 270 | 690 | 30 |

被害発生地は、スギ・ヒノキの造林地ばかりでなく、件数は少ないもののコナラ・キハダなどの広葉樹林でも発生し、10年生までの若齢林での崩落が多く発生した。

被害面積の大半は100㎡～300㎡の小面積であったが、1造林地の合計で3,000㎡の崩落が発生した造林地もあった。

また、造林地等への直接的被害のほかに、知夫村を除く3町においては、合計60路線・350カ所・1,012,670千円の林道施設被害が発生しており、今後間伐等の保育作業への影響が懸念され、早期の復旧が望まれる。

2 干害

平成19年は、冬期に平均気温が高く、降水量が少ない状態で推移した。4月から10月にかけても、平均気温がかなり高く、降水量も少なかったため、6月及び8月に、1～4年生の造林地で干害が発生した。

近年、温暖化が進行し、高温・小雨によって、地温が上昇し、干害の発生しやすい気象条件が続いており、植栽1～2年の造林木を干害から守るため、今後は以下の事項に留意しながら管理を行う必要がある。

- ①適期に植栽し、造林木の根が確実に張り、しっかり活着できるように植え付ける。
- ②下刈り作業は高温・小雨期に入る前に終了させ、刈り取った草を造林木の周囲に集めるなどして、土壌中からの水分蒸発を少しでも抑える。
- ③高温・小雨期の下刈りは、造林木周辺の土壌水分を多量に蒸発させるため、下刈り実施時期を考慮する

3 林野火災

平成19年の林野火災は11件発生し、28.2haを焼失した。また、1カ所の焼失面積が5haを超える大規模な林野火災も益田市及び安来市において発生した。冬期に平均気温が高く、降水量が少なかったため、11件の内、3月に2件、4月に6件発生しており、春の乾燥した時期に多くが発生した。発生原因は、枯れ草を燃やした際、火が森林に燃え移ったことが原因の大半であった。

4 雪害

平成19年12月末の降雪により、局所的に幹折れ・裂け、根返りなどの雪害が発生したが、大面積に及ぶ被害はなく、局所的な区域に被害が発生したに留まった。

(藤原芳樹)

シイタケ

1 平成19年産シイタケ発生状況と気象

1、2月は強い寒気の南下は一時的で、冬型の気圧配置は長続きしなかった。このため、気温は平年より高く、降水量は少ない冬となった。

1月に松江で積雪を観測しなかったのは1941年の統計開始以来初めてであり、西郷では2月の平均気温の高さが履歴1位となった。

3月は中旬に寒気が南下し気温は低く推移したが、上旬と下旬は3月としては暖かく推移し、まとまった降水量は下旬までなかったため、春子発生に大きく影響した。

4月になってからの周期的な降雨は例年にないほどのダラダラ発生に繋がり、仕上げ乾燥機を使って数日分をまとめて乾燥せざるを得ない状況の中で、生シイタケ販売へ回される量が多かったことが特徴である。また、発生時の降水量不足は「香信」を作りにくくし、特に大葉の生産が困難であったと思われる。

2 平成20年春子の予測

シイタケ栽培で発生を左右する因子は気象条件であり、次の3点がポイントである。

①シイタケ原基が形成される前年9月に十分な水分補給があったかどうか。

②品種ごとに芽切り・発生に必要な適度の低温刺激があったかどうか。

③生育時に降雪、降雨により成長に必要な水分補給と温度があったかどうか。

この3点について検証し、春子発生を予測してみると、

①の原基形成時の水分補給については、6～8月は降水量が平年より多かったが、原基づくりに大切な9月は平年よりかなり少なかったことから、水分補給が十分でなく、原基数は平年に比べて少なかったと思われる。それだけにほだ倒しや散水により、古ほだ木への水分補給が重要であった。

②の低温刺激について、芽切り・発生時期である2月は冬型の気圧配置となり、平年と同様の低温刺激が得られたと思われる。

③の生育時の水分補給については、2月の降水量が平年より多く、原基の肥大成長に有利な条件となった。

今後の発生見込みであるが、3月の気温が品種特性に見合った日が続くと本格発生につながるが、秋の原基形成不良の影響や用役ほだ木の減少等から、生産量は昨年より若干減少するものと思われる。古ほだ木からの発生の良否が春子増産の鍵なので、積極的に発生操作に努めていただきたいものである。

3 市況情報

島根県産乾シイタケについては、今年度より全農椎茸事業所（埼玉県久喜市）での販売が開始された。

島根県特別入札会が初めて開催された6月27日には1,123ケースが出品され、平均単価は4,378円/kgであった。

11月1日の入札会にも本県産が37ケース出品された。

9月5日の入札会からは、5,000円台/kgの平均単価となり、中国産製品の安全性を危惧する報道もあることから、国産乾シイタケへの切り替えが進む見通しである。一方、需要に見合

った生産量を維持する必要があることから、全農椎茸事業所のホームページ等から情報を収集し、採取・乾燥面等品質面に注意しながら、一層の生産振興に努める必要がある。

なお、選別規格は数年間は移行期間とみて島根規格で出荷し、以後は全農規格へ移行する方向である。

全農椎茸事業所のホームページアドレス <http://www.zennoh.or.jp/bu/nousan/siitake/>

(中山茂生)

森林保護

1 林業苗畑の病虫害

(1) マツ褐斑葉枯病

今年、出雲地区のクロマツ2年生苗畑で本病が発生し、育苗本数5,000本のうち約9割が罹病した。このうち、約2割の苗木では当年葉が本病により激しい葉枯症状を呈した。被害苗畑では9月上旬から針葉上に黄褐色の斑点が生じ、のちに斑点部から葉先にかけて灰褐色の枯れを発生をした。通常、過度の芽摘み等で衰弱した庭園木・街路樹にのみ発生を認めていたが、苗畑での発生報告は国内で今回が初めてである。

この病害の病原菌は糸状菌（カビの仲間）の1種で、アメリカ合衆国南部ではマツ類の苗木等を枯らす重要病害として19世紀頃から知られていたが、日本では1996年島根県内の庭園木で初めて発生が確認された。本病は前年の発病葉上に形成された胞子によって伝染する。その伝染時期は6～9月頃で多湿な条件の続く梅雨時期が主である。今年是一年間を通じて高温で、比較的少雨の年であったが、6月下旬～7月中旬と8月下旬にまとまった降雨があったので、この時期に苗畑でも被害が拡散したと考える。

○その対策

ア 伝染源の除去

①前年発病した病葉や苗落葉を取り除き、焼却処分する。

イ 苗ほの滞水等多湿時にとるべき対策

①溝の掘り下げ等による排水作業。

ウ 薬剤による防除

①現在この病害防除の登録薬剤はない。庭園木・街路樹では被害が各地で多発していることから、使用できる防除薬剤の早期登録、適用拡大が望まれる。

2 林地の病虫害

(1) 松くい虫（マツ材線虫病）

平成19年12月末現在の松くい虫被害量は、前年同期（平成18年12月末：24,446 m^3 ）と同様の約24,000 m^3 （速報値）であった。相変わらず隠岐島後地区での被害が目立ち、県全体の被害量の約4割以上を占めた。平成19年度末被害もほぼ前年並みと見られる。本土では、奥出雲町や飯南町といった標高の高い奥部地域での増加が特徴であった。

本病被害量の多少は夏期の気象条件と密接な関係がある。病原線虫の媒介昆虫であるマツノマダラカミキリは本県では6月上旬～7月中旬に脱出するが、成虫の活動は高温小雨時に活発となって線虫の伝播頻度が高まり、ひいては被害木の増加につながる。また、夏期の高温、乾燥は発病の進展を早め、マツノマダラカミキリの産卵時（7～8月）には産卵対象となる衰弱・枯死木が多量に生じる。その結果、次年度のマツノマダラカミキリ発生数が増加して、周囲への被害拡大が激化する。

本年夏期の気象状況をみると、カミキリの羽化脱出期の6月の平均気温が本土、隠岐島とも高かったが、7月に入ると平年以下であった。また、同時期の降水量は本土、隠岐島共に平年並み～多い年だった。今年この時期の気象条件は、特に被害の増加をもたらすものではなかった。

(2) ブナ科樹木萎凋病（ナラ類の集団枯死）

近年、本県西部地方を中心にコナラが夏～秋に葉が赤褐色に変色して枯れてしまう被害が拡大している。これは体長が4.5mm程度の「カシノナガキクイムシ」（以下「カシナガ」）という小さな甲虫が媒介する、ラファエラ菌の一種（以下「ナラ菌」）によって引き起こされる伝染病であることが近年になって判明した。

昭和61年に県西部でナラ枯れの発生が県内で初めて確認され、その後局所的に小規模な発生と終息を繰り返していた。しかし、近年になり県西部地域全体で広範囲に被害が発生するようになり、平成18年には1,376本、平成19年には2,286本のコナラを主とするナラ類の枯死を確認した。

このカシナガ成虫は島根県では5月下旬～6月下旬にかけて、前年被害木から脱出し、また晴天の日に活発な拡散活動を行うことが知られている。今年も、この脱出時期が春先から6月中旬まで続いた晴天高温・少雨の時期と重なり、被害の拡大に関与したと考えられる。

さらに、8月以降10月まで続いた記録的な高温が、萎凋病である本病の発病を促進したと考えられる。

このように「ナラ枯れ」の発生にとって、好条件であった今年の気象から、次年度も被害が拡大する可能性が高く、被害先端地域では新たな被害発生に十分注意する必要がある。

○その対策

ア 被害材の焼却やチップ化による駆除

- ①被害木の伐採が可能な場合は、カシナガ成虫が羽化脱出する5月中旬までに伐採して焼却や、チップ化する方法。

イ 被害発生区域から被害材を移動しない

- ①成虫の発生する5月中旬までにチップ化や焼却しない場合は、被害材を発生区域外へ移動しない。

ウ 切り倒さずに処理する防除方法

- ①立木のまま幹の中へ薬剤注入処理や、幹へのビニールシート巻き、粘着材を吹き付けて羽化脱出や幹への穿孔を防ぐ、などの方法が各県が取り組まれている。

（古瀬 寛）

平成19年 農業気象災害被害状況

| 種類名 | 5月16日の強風による災害 | | 7月1日の大雨による災害 | | 台風第4号(7月14日～)による災害 | | 梅雨末期の長雨・日照不足(7月1日～)による災害 | | 台風第5号(8月2日～)による災害 | | 8月5日の強風による災害 | | 暑熱(7月1日～)による被害 | | 8月30日からの大雨災害 | | 10月27日の強風による災害 | | 11月18日からの強風による災害 | | 12月30日からの積雪・強風による災害 | | 2月23日からの雪・冬期風浪による災害 | | 2月29日からの竜巻による災害 | | 合計 | | | | |
|----------|--------------------|-------|--------------------------|--------|--------------------|-------|--------------------------|--------|-------------------|-----|-------------------|------|--------------------------|---------|---------------------------|--------|----------------|--------|------------------|---------|---------------------|--------|---------------------|--------|-----------------|---------|---------|--------|--------|---------|-----|
| | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | 面積等 | 被害額 | | | |
| 水陸稲 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 252.24 | 26,487 | | |
| 雑穀、いも、豆類 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1.00 | 500 | | |
| 農 野菜 | | | | | | | 0.97 | 3,597 | | | | 0.25 | 100 | | | 0.03 | 200 | | | | | | | | | | | 1.25 | 3,897 | | |
| 果樹 | | | | | 41.30 | 7,218 | 1.78 | 11,432 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 43.08 | 18,650 | | |
| 作物 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 花き | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 桑 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 茶 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| その他 | | | | | | | | | | | | | | | 1.00 | 245 | | | | | | | | | | | | | 1.00 | 245 | |
| 小計 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 41.30 | 7,218 | 2.75 | 15,029 | 0.00 | 0 | 0.25 | 100 | 0.00 | 0 | 254.27 | 27,432 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 298.57 | 49,779 | |
| 果樹 | 0.15 | 500 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 0.10 | 300 | 0.25 | 800 |
| 桑樹 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 茶樹 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 小計 | 0.15 | 500 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.00 | 0 | 0.10 | 300 | 0.25 | 800 | |
| 施設被害 | 1,043.9 | 2,711 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 0.1400 | 234 | 0.0450 | 200 | 0.0000 | 0 | 0.0200 | 330 | 0.0372 | 73 | 0.0919 | 99 | 1.7379 | 4,182 | 0.2502 | 354 | 0.3300 | 1,600 | 3.70 | 9,783 | | | |
| 畜産 | 0.0000 | 0 | 0.1050 | 40,000 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 32頭、465羽 | 11,196 | 0.15、607m、7.7km外 | 56,770 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 0.0000 | 0 | 0.1050 | 107,966 | |
| 合計 | 1,193.9 | 3,211 | 0.1050 | 40,000 | 41,300 | 7,218 | 2,750 | 15,029 | 0.1400 | 234 | 0.2950 | 300 | 11,196 | 254,290 | 84,532 | 0.0372 | 73 | 0.0919 | 99 | 1,737.9 | 4,182 | 0.2502 | 354 | 0.4300 | 1,900 | 302,627 | 168,328 | | | | |
| 被災市町村 | 浜田市、江津市、益田市、吉賀町 | | 出雲市 | | 安来市 | | 安来市 | | 安来市、飯南町、江津市、益田市 | | 邑南町 | | 安来市、出雲市、大田市の熱中症、熱射病による死亡 | | 土砂災害、冠水、牧場崩壊、牧道崩落、肉用牛の死亡等 | | 益田市 | | 益田市 | | 美郷町、浜田市、益田市 | | 安来市、益田市 | | 出雲市 | | | | | | |
| 被害状況 | ぶどうの果実の折れ、ハウスハウス被害 | | 牛舎隣接部の法面の地すべり及び法コンクリート崩壊 | | なしの落果 | | ぶどう、モロシの裂果、被害多 | | ハウスハウス被害 | | なしの果実の損傷、ハウスハウス被害 | | 肉用牛、乳用牛、探卵鶏の熱中症、熱射病による死亡 | | 土砂災害、冠水、牧場崩壊、牧道崩落、肉用牛の死亡等 | | ハウスハウス被害 | | ハウスハウス被害 | | ハウスハウス被害 | | ハウスハウス被害 | | ぶどう樹体、ハウスハウス被害 | | | | | | |

単位:ha、千円

市町村別被害状況(被害金額)

単位:千円

| 異常気象名 | 5月16日の強風による災害 | 7月1日からの大雨による災害 | 台風第4号(7月14日～)による災害 | 梅雨末期の長雨・日照不足(7月1日～)による災害 | 台風第5号(8月2日～)による災害 | 8月5日の強風による災害 | 暑熱(7月1日～)による被害 | 8月30日からの大雨災害 | 10月27日の強風による災害 | 11月18日からの強風による災害 | 12月30日からの雪害・強風による災害 | 2月23日からの雷・冬期風浪による災害 | 2月29日の竜巻による災害 | 合計 |
|-------|---------------|----------------|--------------------|--------------------------|-------------------|--------------|----------------|--------------|----------------|------------------|---------------------|---------------------|---------------|---------|
| 振興C | | | | | | | | | | | | | | |
| 市町村 | | | | | | | | | | | | | | |
| 松江市 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 東部 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 東出雲町 | | | | | | | | | | | | | | |
| 安来市 | | | 7,218 | 15,029 | 80 | 0 | 465 | 0 | 0 | 0 | 0 | 80 | 0 | 22,872 |
| 小計 | 0 | 0 | 7,218 | 15,029 | 80 | 0 | 465 | 0 | 0 | 0 | 0 | 80 | 0 | 22,872 |
| 奥出雲町 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 東部 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 雲南市 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 雲南 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 飯南町 | | | | | 80 | 0 | | | | | | | | 80 |
| 小計 | 0 | 0 | 0 | 0 | 80 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 80 |
| 東部 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 出雲市 | | 40,000 | | | | | 2,440 | 0 | | | | | 1,900 | 44,340 |
| 斐川町 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 小計 | 0 | 40,000 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2,440 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1,900 | 44,340 |
| 東部 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 計 | 0 | 40,000 | 7,218 | 15,029 | 160 | 0 | 2,905 | 0 | 0 | 0 | 0 | 80 | 1,900 | 67,292 |
| 大田市 | | | | | | | 6,090 | | | | | | | 6,090 |
| 西部 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 川本町 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 美郷町 | | | | | | | | | | | 800 | | | 800 |
| 邑南町 | | | | | | 300 | | | | | | | | 300 |
| 小計 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 300 | 6,090 | 0 | 0 | 0 | 800 | 0 | 0 | 7,190 |
| 西部 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 浜田市 | 2,401 | | | | | | | | | | 115 | | | 2,516 |
| 江津市 | 61 | | | | 30 | | | | | | | | | 91 |
| 小計 | 2,462 | 0 | 0 | 0 | 30 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 115 | 0 | 0 | 2,607 |
| 西部 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 益田市 | 709 | | | | 44 | | 2,051 | 0 | 73 | 99 | 3,267 | 274 | 0 | 6,517 |
| 津和野町 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 益田 | | | | | | | | | | | | | | 40 |
| 吉賀町 | 40 | | | | | | | | | | | | | 40 |
| 小計 | 749 | 0 | 0 | 0 | 44 | 0 | 2,051 | 0 | 73 | 99 | 3,267 | 274 | 0 | 6,557 |
| 西部 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 計 | 3,211 | 0 | 0 | 0 | 74 | 300 | 8,141 | 0 | 73 | 99 | 4,182 | 274 | 0 | 16,354 |
| 隠岐 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 隠岐の島町 | | | | | | | 150 | 28,097 | | | | | | 28,247 |
| 海士町 | | | | | | | | 1,300 | | | | | | 1,300 |
| 西ノ島町 | | | | | | | | 55,135 | | | | | | 55,135 |
| 知夫村 | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 小計 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 150 | 84,532 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 84,682 |
| 合計 | 3,211 | 40,000 | 7,218 | 15,029 | 234 | 300 | 11,196 | 84,532 | 73 | 99 | 4,182 | 354 | 1,900 | 168,328 |